

金剛寶戒寺便

<https://www.houkaiji.jp>

令和五年二月一日発行 第一〇七号

檀信徒の皆様こんにちは。私の理想とする檀信徒様とお寺の関係は「ゆりかごから墓場まで」ならぬ「星まつりから墓場まで」です。今でも有難いことに、新しいご家族が増える、とお寺へご挨拶に来て下さる方が少なからずいらつしゃいます。「今度、息子と結婚した〇〇です。これまでの家族同様お願いします。」「待望の孫が生まれました。これで安心です。」などとご報告を頂き、その様な方々は揃って星まつりのお札の追加をされていきます。その様な間柄が私にとってはたまらなく嬉しくなりません。二月三日以降に星まつりのお札はお渡しできます。時間を見つけて受け取りにお越しください。

ご存じの方も多いと思いますが、私はお寺の子供ではなく、売れない絵描きの長男として千葉で生まれました。その割には、週に二回開催する絵画教室が好評で、何不自由なく愛情をかけて育てもらいました。当時の住まいは中古の古びた平屋の一軒家で、国鉄アパートと朝日生命マンションに挟まれており、毎朝出勤していく普通のサラリーマンの家族にあこがれを持っていた記憶があります。

決して楽とは言えない生活の中、大好きな部活を思う存分し、大学まで行かせてもらいました。ただ小学生のころ一番流行していた

ファミコンやゲームウオッチなどを買い与えてくれなかったのは、親の教育方針だけでは無いであろうと子供ごころに思っていました。その様な日常生活から、近くの駄菓子屋に行ってもなかなか買うことが出来ず、十円玉が熱くなるまで握りしめていた恥ずかしい思い出が記憶以上に心に残っています。同世代の友達の中には駄菓子に付いてくる「おまけ」を目的で買いあさり、目当てで無いおまけを平気で投げ捨てる人もいて、軽蔑と嫉妬心を持っていたのも覚えています。そしていま、三人の息子の父親になり、当時の親の大変さと有難さを身に染みて感じています

今回、千三百年記念事業にあたり、非常に高額な寄付金勧募をお願いし、中には疑問を持たれている方もいらつしゃると思います。その様な方々に対して申し開きをするつもりもなく、ご理解頂けないのも仕方がないことと思っております。自分勝手な任職の言い分ですが、千三百年の歴史を持つお寺の事業をするにあたって、後世に誇れるような普請をしたいとの行動ですので、どうぞお許しください。

仏道修行の一つに六波羅蜜行というものがあり、その最初に出てくるのが「布施」です。私は常々、なぜ「布施行」が一番最初なのだろうかと疑問に思っていました。ですが今回の事業に当たり、何となくではありますが、お釈迦様の意図するところが分かったような

気がしています。お布施には施す側と、受け取る側、両方が必要です。私はこれまでお布施に関して、施す側の修行として主に考えしてきました。しかしお布施は受け取る側にとっても大きな修行となる事が分かりました。

お釈迦様の時代、全てを投げ出して出家した沙門は、その衣食住全てを布施によって賄われていました。言葉にするとそれだけです。自分の人生の衣食住全てを人からの施しで生きる。これがどんなにプレッシャーとなるか、どんなに凜として生きなければいけないのかと考えた時、その重たさは計り知れません。

私もこれまでお布施を頂戴し生活をさせて頂いていましたが、そこには「何か」の対価に対してお布施を頂いているとの意識があったことに気づきました。今回の勧募に当たり、布施の重たさが身に染みています。四年ぶりの巡廻布教のご案内になります。

令和五年三月八日（水曜日）十四時から

金剛宝戒寺 本堂において

演題「私にとつてのお大師さん」

高野山本山布教師 大河榮正 僧正

令和五年の干支は癸卯（みずのと・う）です。六十年に一回、同じ巡りあわせになります。百二十年前は日露戦争の前年に当たります。これが取り越し苦労となり、跳ねるが如く飛躍の一年となる事を願うばかりです。